

ワシントン.ポストによると、バージニア大学、ウィリアム&メリー.カレッジ、ジョージ.ワシントン大学、コロラド大学、アメリカン大学など伝統的な大学も授業中のラップトップ使用を禁止している。アメリカでは、大学の授業は自己研鑽の一部に過ぎないと思う学生も多く、生徒の成績の良し悪しにさほど関心を持たない教育者が多い現状で、ラップトップが教育の現場に及ぼす影響に目を向け始めた教育者が増えてきたことは、その動機に関係なく注目に値する。教室でのラップトップ普及の結果、教授が質問してもその質問を聞き返すなど明らかに、人の話を聞いていない生徒が増えたことや、成績低下などの支障が懸念されるようになり、これがラップトップ使用禁止の主な原因になっているようである。もちろん、ラップトップを使用する学生の中には、講義を真面目に聞きながらタイプしている学生もいるため、「ラップトップ禁止は独断的で権威的である」として、反発する学生もいる。彼等にとってラップトップが生活の一部になっているため、大学の教育現場では一種の混乱が生じているようだ。

法律関連書の著者でもあるジョージタウン大学の法律の教授、ディビット.コールはすでに 2008 年には、授業中のラップトップ使用を禁止したが、その理由を「ラップトップにタイプする作業は、講義をそのまま転写するだけで、速記方法に集中するあまり、クラス討議でお互いに情報交換する過程を阻害する」と述べている。従来のペンを使ってノートに書く作業は、コンピューターにタイプするよりはるかにスロー.テンポになるが、実際「聞くことにより、講義の重要なテーマが何であるか考える力を学生に養成することが可能である」と述べている。つまり、前記の方法では人間の思考力にもマイナス要素の影響があるということである。またコール教授は、全面的に禁止せず、交代で毎回 2 名の生徒に講義をタイプすることを許可し、その記録は他のクラスメート全員も利用できるシステムを採用している。彼の講義に学生が集中できるようになることをねらった巧みな対処法であるといえる。その結果、ラップトップをクラスで使用しなければ「80%の学生がクラスでのディスカッションに参加するようになった」と報告している。また、ワシントン.ポストはコール教授がアンケート調査を行った際、95%の生徒がラップトップを「講義のメモを取る以外の目的に使用していた」ことを告白したと伝えている。又、コール教授は、他の大学の状況も調査し、シカゴ大学や他の大学ではラップトップをクラスに持ち込むこと自体は個人の自由としているが、授業中は自動的にインターネットを切断していることをワシントン.ポストに報告し、「パーソナル.コンピューターは人間の生活に革命をもたらしたが、反面脅かす面もある」と述べている。

今年3月9日ワシントン・ポストは、大学教育現場でPCが導入されるようになったいきさつやコンピュータ技術がもたらすマイナス面を伝えている。例えば、マサチューセッツ州、ボストンにあるベントレイ大学は1985年に個人のポータブル・コンピュータをクラスに持参することを学生に義務づけたアメリカで最初の大学であるが、1990年代になると、授業に熱中しない学生が出てくるなどの問題が指摘されるようになった。2000年代になると、授業中はインターネットのアクセスができなよう教授がスイッチを切断できるシステムを導入し、「スイッチの切り替えを頻繁に繰り返している状況である」と語っている。

同紙によれば、2006年、メンヒス大学が全国で最初に法科の学生に対し教室内でのラップトップ使用を禁止した際、学生等はアメリカ法律協会に苦情を訴えた事例がある。ボストン・グローブによると、当時ハーバード法律学校でもラップトップの使用を禁止するかどうかが職員の投票を検討する動きがあり、個人的に禁止した教授も現れている。オクラホマ大学の物理学の教授は威厳が損なわれたとして、ある生徒のラップトップに液体窒素を注入し、そのコンピュータを床にたたきつけたという過剰反応の事例もある。ある生徒が、その一部始終をビデオに捕らえ、ユーチューブで報じたため大反響があった。

ある大学では、クラス内でのインターネットのアクセスをしばらくの間禁止する提案もある。しかし、インターネットのアクセスを頻繁に必要とする授業形式を採用する教授と、クラス・ディスカッションを重視する教授との間で論争も起きている。生徒のラップトップ使用を支持する教授は、「講義の内容に魅力があれば、生徒は熱心に聞く」と主張。一方、ラップトップ禁止に同意する教授等はクラス・ディスカッションを重視する傾向が強く、「成績が低下していることから、コンピュータを使わない方が授業に集中できる」とし、一方的な講義よりお互いに意見を述べあうことで学ぶことも多い社会参加の重要性を強調している。

しかし、すべての学生がこれらの意見に同意するとは限らない。ボストン・グローブはハーバード法律学校の学生委員会が1000人の学生にアンケート調査を行ったところ、ほぼ30%の学生がラップトップ禁止に反対し、4人に1人が、「禁止になったらクラスに参加しないことが多くなるだろうと答えた」と報じている。講義内容をラップトップにタイプすることのメリットは、修正、追加、削除など簡単に編集できる点にあると学生は述べている。

この調査結果は、ラップトップが如何に便利で手書きより効率性に優れているかを物語っており、一度その利便性に慣れてしまうと、古来の方法に逆戻りできない人間の習性を示唆している。また、勤勉な日本人の感覚から言えば、ラップトップが教室で使用できるメリットを利用して、講義中サボっている学生は高い学費を支払ってくれる親に対しても、教授に対しても常識や礼儀に欠けており、結局は人間性の問題であるという気がする。大学側の責任としては、このような状態が深刻化する前に、講義の記録方法について機能的なプログラムを開発する必要があったと言える。ラップトップで講義内容をタイプすることが即「思考力の喪失につながる」か否かの論議も短絡的であると思う。これには個人差もあり、もっと科学的に検証されるべきである。

ワシントン.ポストは、インターネットが利用できる形態電話、アイフォーン、ブラックベリーなど高度な通信コンピュータ技術が進んでいる今日、教室内でのラップトップ禁止は時代に逆流しているという印象を持っているようだ。アメリカと同様、コンピューターの先端技術を誇る日本の教育者や指導者にも考えさせられる問題ではないだろうか。